

厚生労働省が2022年度に実施した国民の意識調査で、治る見込みがない病気になったとき、最期を迎える場所の希望で最も多かったのは自宅の43.8%、ほかには介護施設が10.0%、病院が41.6%だった。だが、実際に亡くなった場所は病院が64.4%、自宅は16.4%（24年）。希望と現実には差がある。がんが末期になったとき、住み慣れた自宅などで最期を迎えることはできるのか。がんの在宅緩和ケアに携わる3人に現状や課題を聞いた。（岩本進）

# がんと生きる 最期は自宅で かなえるケア

ホームケアクリニック札幌院長 藤原葉子さん（58）

## 常に対応できる体制必要

在宅緩和ケアは、がんに限らず命を脅かすような病に直面する人が、自宅など住み慣れた場所です。心身の苦痛を和らげ、安心して生きるための医療やケアなどです。



私は、連絡や往診に24時間365日対応し、看取りを行う在宅療養支援診療所（在宅診療）の医師。訪問看護師や薬剤師、ソーシャルワーカーやケアマネジャーなど診療所内外の多職種チームで、患者さんと向き合っています。

課題もあります。北海道で札幌は、望めば最期まで家で過ごすことはできるでしょう。だが、施設や人材に偏りがあり、地方では在宅緩和ケアが困難な地域があります。そんな地域に住む、家で最期まで過ごしたいという人の願いをかなえるために何ができるか。医療者らの仲間と支援策などを考えています。

（岩間さん）。講演後、総合討論で話を深める。

入場無料。当日直接会場へ。問い合わせは、日本尊厳死協会道支部へメール [hokkaido@songenshi-kyokai.or.jp](mailto:hokkaido@songenshi-kyokai.or.jp) か、ファクス011・214・9066で。

札幌訪問看護ステーションエース管理者 岩間知美さん（44）

## 「自分らしく過ごす」尊重

訪問看護ステーションは看護師などが自宅を訪ね、主治医の指示書やケアプランに沿って看護を提供しています。病気の管理、日常生活の援助、リハビリなど。私たちは看取りも行っています。自分らしく過ごすこと、本人の思いを尊重した



例を紹介します。末期がんの高齢男性です。家を訪ねると居間のソファに横たわり、飲食ができない状態でした。水分補給の点滴以外は「何もしいていい、死んでいい」と話します。栄養補給の点滴も床す

KKR札幌医療センター病院院長 磯部宏さん（69）

## 大切にしたいことを伝えて

呼吸器内科医として40年以上、肺がんなどになったたくさんの人と向き合ってきました。ある末期の女性は「家に帰ると音が違う」と言っていました。入院中の病院エレベーターが動くとい



った「非日常の音」ばかりだが、自宅では、子どもの声や家族のざんざんが聞こえる。「日常がある。家に帰ってよかったです」と話していたことを覚えています。別の末期の女性は入院を繰り返してしま

## 札幌で18日講演会

記事の3人が登壇する講演会「最期まで自分らしく生きるために—がんの在宅緩和医療と尊厳死」が18日午後1時半から共済ホール（札幌市中央区北4西1、共済ビル6階）

で開かれる。日本尊厳死協会北海道支部と札幌市在宅医療協議会の共催。

演題は▽肺がんを患う方々と向き合っていくこと（磯部さん）▽患者さんをお看取りすること（藤原さん）▽「何もしたくない」を選択した末期がんの利用者に寄り添う